学位申請論文要旨

アカデミック・ライティングにおける不安の実態と授業参加による変化

-日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生を対象に-

一橋大学大学院言語社会研究科

博士後期課程

LD162005

田　佳月

１．研究背景と研究目的

日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生は、大学での勉学に対応するため、アカデミック・ジャパニーズを身に付ける必要がある。しかしながら、彼らは日本語能力試験 N1 レベルに合格したとしても、アカデミック・ジャパニーズを十分に身に付けていない場合が多い。特に、レポートの作成を中心としたアカデミック・ライティングに関しては、筆者の周りにも、専門科目の授業で課されたレポートにうまく対応できず、不安を抱いた留学生が多く見受けられた。

他方、留学生のレポートの執筆力を向上させるため、多くの大学では、留学生のためのアカデミック・ライティング授業が実施されている。授業では、留学生はレポートの作成に必要な言語知識や技能を学ぶことが多い。そのため、授業を通して、留学生のレポート作成上の不安が減少される方向へ変化していくだろうと予想される。

そこで、本研究は以下の 2 つの課題を設定し、具体的に検討することを研究目的とする。

課題 1 : 中国語を母語とする留学生が日本語でレポートを作成する際に抱いた不安はどのようなものであるかを解明する。

課題 2 : アカデミック・ライティング授業を通して、中国語を母語とする留学生のレポート作成上の不安はどのように変化するかを検討する。

２．先行研究

第 2 章では、本研究に関わる 2 つの重要な概念である「不安」と「アカデミック・ライティング」についての先行研究を概観した。「不安」に関しては、心理学における不安の基本概念を押さえた上、第二言語不安研究、及びライティング不安研究を概観した。「アカデミック・ライティング」に関しては、ライティングの特徴とメカニズム、アカデミック・ライティングの概念と種類を整理し、レポートを中心とした留学生のためのアカデミック・ライティング研究を概観した。それらの先行研究から、日本語教育における第二言語不安研究では、アカデミック・ライティングに焦点を置いたライティング不安研究が欠如していること、留学生のためのアカデミック・ライティング研究について、不安という観点からの検討が不十分であるという課題が示された。

そのため、本研究は、日本の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生を対象に、アカデミック・ライティングにおける不安、とりわけ、論証型レポートの作成に伴う不安（本研究では、そのような不安を「学術レポート執筆不安」を呼ぶことにする）の実態を明らかにするとともに、アカデミック・ライティング授業による不安の変化を検討することを研究課題とした。

３．調査概要と結果

本研究の調査は、大きく 4 つに分かれる。学術レポート執筆不安尺度の作成（第 4 章）、学術レポート執筆不安の実態把握（第 5 章）、学習技術型授業による不安の変化（第 6 章）、専門基礎型授業による不安の変化（第 7 章）の 4 つである。各章の調査概要と結果を以下に述べる。

第 3 章では、本研究の第 4 章～第 7 章で用いる研究デザインを述べた。本研究の研究課題を解明するためには、量的及び質的研究手法の両方が必要であると考えられるため、量的及び質的研究手法を混合して用いる混合研究法を採用した。具体的には、第 4 章と第 5 章では、質的データの収集・分析の後、引き続いて量的データを収集・分析する探求的デザインを採用した。第 6 章では、量的及び質的データを並行的に収集・分析するトライアンギュレーションデザインを採用した。一方、第 7 章では、半構造化インタビューという質的研究手法のみで調査を実施した。

第 4 章では、学術レポート執筆不安尺度の作成を目的として、まず、都内の H 大学で学ぶ中国語を母語とする留学生 4 名を対象に、PAC 分析を用いて予備調査を実施し、学術レポート執筆不安の項目を 25 項目収集した。その 25 項目を用い、次に都内の大学で学ぶ中国語を母語とする留学生 105 名に質問紙調査を実施し、因子分析を行った結果、最終的に 22 項目が選定され、学術レポート執筆不安尺度が「日本語表現に対する不安」「文章構成に対する不安」「執筆形式に対する不安」「教員評価に対する不安」「テーマ構想に対する不安」「文献収集に対する不安」の 6 因子構造であることが明らかになった。また、尺度の内部一貫性を検討した結果、高い信頼性が確認された。さらに、尺度はアカデミック・ライティングの構成要素である「基礎」「言語」「技能」「専門」に関わる不安をある程度カバーしていると言えるため、内容的妥当性も検証された。

第 5 章では、第 4 章で実施された質問紙調査を定量的に分析し、中国語を母語とする留学生の学術レポート執筆不安の実態把握を試みた。その結果、中国語を母語とする留学生が学術レポート執筆不安を抱いている傾向が示され、最大の不安要因は日本語表現で、次いでは、テーマ構想、教員評価であることが確認された。また、重回帰分析から、性別、及びレポートの得意不得意の自己評価という学習者要因は不安に大きな影響を与えるが、学年、日本語学習歴、日本滞在歴、日本語能力、アカデミック・ライティングの学習経験という学習者要因の影響は小さいということが示された。さらに、t 検定や分散分析を用いて各学習者要因による影響を詳しく検討した結果、女性の留学生、レポートの作成に苦手意識がある留学生、日本語能力が中級レベルの留学生、アカデミック・ライティングの学習経験のない留学生がより不安を感じやすいということが明らかになった。

第 6 章では、都内の H 大学で実施された留学生のための、学習技術型のアカデミック・ライティング授業を調査した。中国語を母語とする留学生 6 名を対象に、1 学期にわたって

学術レポート執筆不安尺度を活用した質問紙調査と半構造化インタビュー調査を 3 回ずつ並行的に実施し、授業参加による不安の変化を明らかにした。その結果、6 名の調査協力者は授業開始当初、アカデミック・ライティングの構成要素である「基礎」「言語」「技能」「専門」の未熟な部分にそれぞれ不安を抱いたことが示されたものの、授業を通して未熟な部分の熟達度が向上することで、不安に変化が生じ、徐々に減少に向かう傾向が見られた。一方、アカデミック・ライティングの構成要素のどの部分が既に身に付いているか、また、授業を通してどのような学びがどこまで達成できたかは異なるため、不安が十分に解消されなかったり、新たな不安が生じたりするケースもあった。調査協力者の不安は授業を通して軽減されたかどうかには個別性があると考えられるものの、アカデミック・ライティングの構成要素のどちらにも不安がある場合、1 学期間の授業だけではその不安が解消しきれないことも示唆された。

第 7 章では、都内の H 大学で実施された留学生のための、ピア・レスポンスを取り入れた専門基礎型のアカデミック・ライティング授業を調査した。中国語を母語とする留学生 11 名を対象に、1 学期にわたって半構造化インタビュー調査を 3 回実施し、授業参加による不安の変化を明らかにした。その結果、授業開始時に、6 名の調査協力者がアカデミック・ライティングの構成要素である「言語」「技能」「専門」にそれぞれ不安を感じており、授業の進行とともに、執筆形式と文章構成という「技能」に対する不安は大きく減少したが、「言語」と「専門」に対する不安はレポート作成の課題が認識されたことでより多くの調査協力者が感じるようになったことが分かった。授業終了後に、「言語」と「専門」に対し、一部の調査協力者の不安は減少したが、一部の調査協力者の不安は継続しており、また、「技能」の一部である文献収集に対する不安が残存していたことも分かった。文献収集に対する不安が軽減されなかった原因としては、教師の授業方法であること、「言語」と「専門」に対する不安が軽減されなかった原因としては、一部の調査協力者は仲間や教師に依存する意識があり、ピア・レスポンスに適応できなかったことが示唆された。

４．教育への提言と今後の課題

以上の結果を踏まえ、第 8 章では、学術レポート執筆不安という観点からの、留学生のためのアカデミック・ライティング教育への提言と、研究意義、今後の課題を述べた。

留学生のためのアカデミック・ライティング教育について以下の 4 つを提言した。それは、(1) 留学生のためのアカデミック・ライティング授業において、教師は留学生の不安に意識して指導を行うこと、(2) 段階的で、学士課程を通じたライティング指導が必要であること、(3) ピア・レスポンスなどの協働学習の理念に基づいた授業活動を取り入れる場合、留学生の能力やビリーフに応じて個別に柔軟に対応すること、(4) 留学生自身が不安をコントロールする能力を育成すること、の 4 つである。

本研究の意義としては、今後の第二言語不安研究において、ライティング不安研究の領域をさらに拡大し、推進されることが期待できる。また、今後の留学生のためのアカデミック・ライティング教育において、1つの有益な情報となると考えられる。

一方、今後の課題は、(1) 日本人学生の学術レポート執筆不安の実態を明らかにし、留学生と比較・対照すること、(2) 留学生の産出物（レポート）を分析し、不安の変化と能力の向上との関連を検討すること、(3) 不安軽減の仮説を立て、教育実践を行って検証すること、(4) 不安だけではなく、喜びや興味、自信、自尊感情などのポジティブな感情にも着目し、総合的に取り込むこと、の4つである。